

瀬戸市における学校間の言語差

丹 羽 一 彌

School Districts and Linguistic Differences in Seto

Kazuya NIWA

はじめに

愛知県瀬戸市で中学生の使用語や理解語を調査する機会に恵まれた。中学生のことばはかなり共通語化してきてはいるが、まだ土地の方言形も使われているし、共通語形と異なる新語形も広がっている。今回の調査で、それらの使われる割合が学校によって異なっていたり、男女で差があったりすることがわかった。そのうちの男女差については既に述べたので、本稿では学校間の差について述べてみたい¹⁾。

前稿でも述べたが、中学生の調査は次のようにしてなされた。

◆調査時期 平成元年10月, 11月

◆被調査者 瀬戸市内には市立中学校8校と私立中学校1校がある。このうち市立中学校8校の二年生全員を対象とした。ただし都合でできなかったクラスが1クラスある。市の北部には市外の学校に委託されている生徒が少数いるが、その生徒達もできなかった。また私立中学校は特定の学区がないし、市外から通学してくる生徒もいるので除いた。

必要事項の記入漏れなどを除いたので、有効回答数は次のようである。

	品野	祖東	本山	水無瀬	光陵	幡山	南山	水野	合計
男性	81	94	51	90	240	148	147	129	980
女性	66	95	42	114	220	106	142	113	898
合計	147	189	93	204	460	254	289	242	1878

この中には市外から転入してきた生徒が少数ある。本稿では、ある学校で使われていること

ばの使用率を他校と比べるから、そういう生徒も合わせて計算した。また両親の出身地、祖父母との同居なども調べた。しかし今回程度の調査項目数では、そういう個人のこととことばとの関係まではわからない。

◆調査方法 選択肢によるアンケート調査である。ただし配付して回収する方式ではなく、筆者が各学校の体育館などで全員に説明しながら、その場で使用語には○を、理解語には下線をつけてもらった。光陵中学校だけは人数が多いので、校内放送で説明し、各教室で記入してもらった。従って臨地調査的なアンケート調査ということになるのか。

調査項目は50である。なお複数の選択肢に○を付けてもよいことにした。

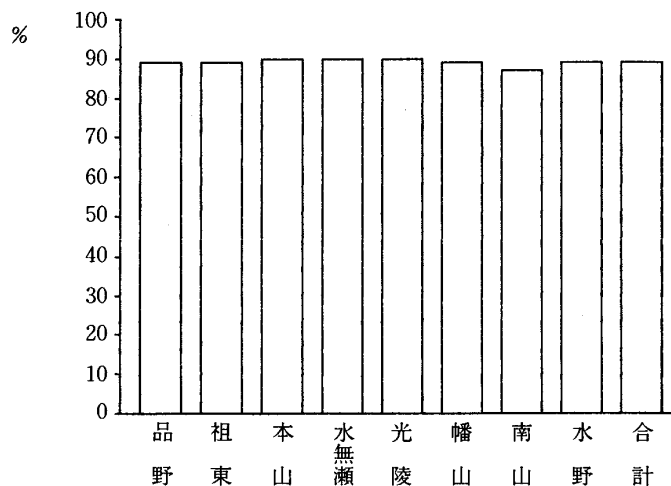
学校差の小さいもの

本稿では、伝統的な方言形と新しく広がった語形とを区別せず、使用される率が学校間で差があるかないかを見てゆく。まず差の小さいものである。

学校差のない語形とは、どの学区でも同じように使われているものであるから、市内では地域差なく使われている語である。この中には、当然のことながら、ヤマ〈山〉ヤカワ〈川〉のような共通語と同じ形の語も入るが、これらについてはここで述べるまでもない。そういうものを除くと、どの中学校でも同じような割合で使われている方言形はそれほど多くない。特に高率で差の小さいものは少ない。

◆ドベ〈最下位、びり〉図1

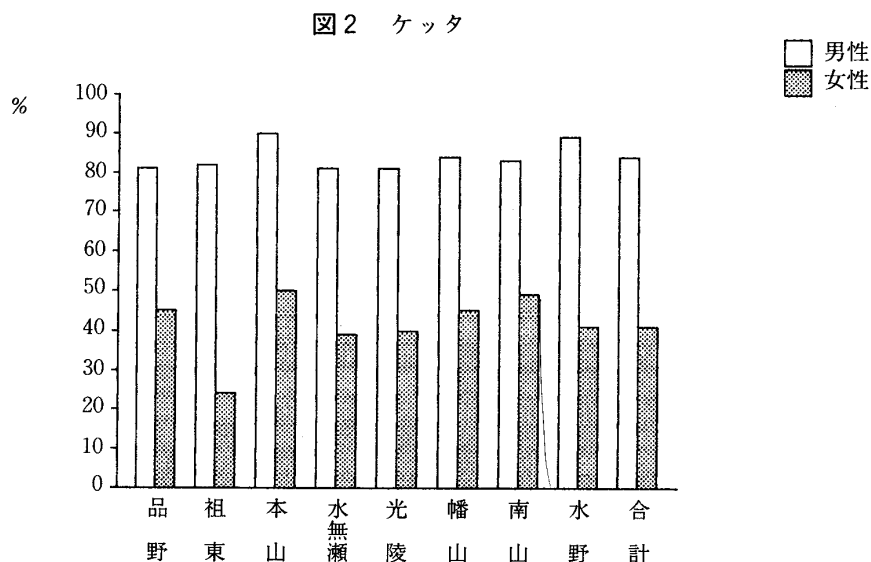
図1 ドベ



高率で使われていながら学校差の小さいものにドベ〈びり〉がある。ドベとビリの両方に○をつけた者を入れると、ドベを使うと答えた者はどの学校でも90%前後であり、学校差は極め

て小さい。今回の調査では、共通語形でない形がこのように使われている例は、他に見られなかった。

◆ケッタ〈自転車〉図2



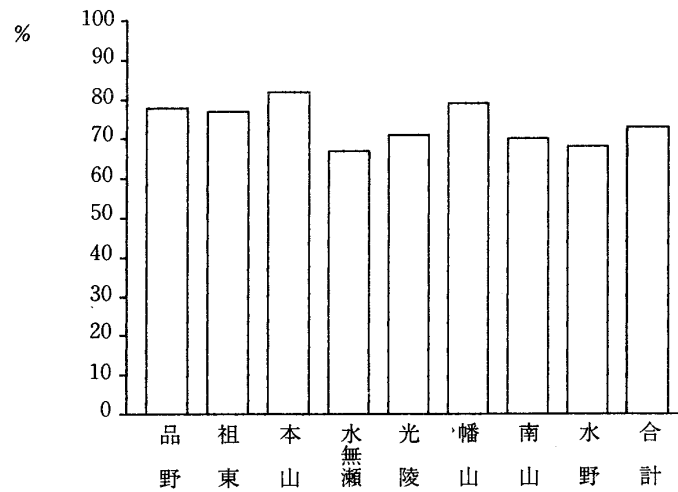
自転車のことをケッタと言うのは東海地方の若年層に広がっている俗語である。瀬戸市の中学生の間でよく使われていて、各校6～7割である。語形が俗語的でありすぎるためであろうか、女子生徒にはあまり使われていない。そのため男女別のグラフにした。男性の俗語であるから、男子生徒だけを比べれば、学校差も小さく、かなり高率である。

本稿の内容とは直接の関係はないが、ケッタが瀬戸市北東部の上品野町で使用語となったのは昭和23年か24年生まれからである²⁾。この年齢の人達が中学生高校生になって使い始めたとなると、上品野町には昭和30年代の後半から40年ごろに伝わったことになる。他の地域にもほぼこのころか、その少し前くらいに広がったのではないだろうか。東海地方のケッタは若年層の間に急速に広がったと考えられるから、それ以前に生まれた人の言語形成期にはなかったことばである。従って若年層から聞いて知ってはいても使わない³⁾。

◆コヤー〈おいでよ〉図3

コヤーは〈来い〉の丁寧な表現で、〈おいでよ〉というぐらゐの意味である。これもケッタと同様に、近年、若年層の間で使われ始めたものである。中高年層の使う伝統的な方言形はイリヤーであったが、いつの間にかコヤーに交替した。ある程度の学校差はあるものの、今では各学校でよく使われている。

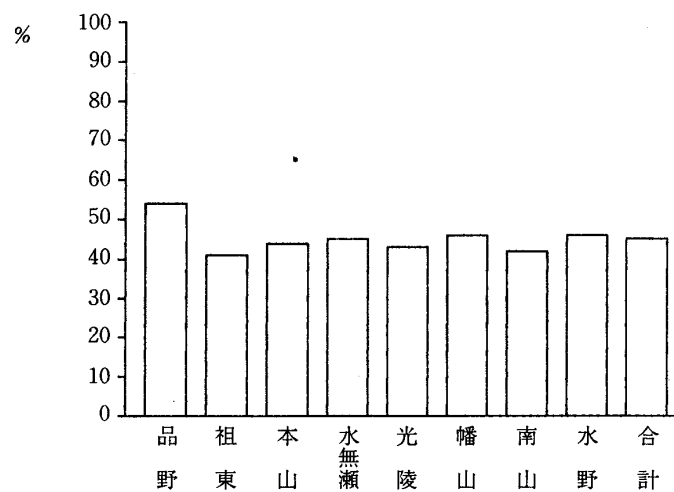
図3 コヤー



尾張地方にはヤースという敬語の助動詞がある。形態的には /jaas~'jaas/ という派生動詞形成辞であり、カク〈書く〉につけば、カキヤース /kak-jaas-u/ 〈お書きになる〉となる。このカキヤースの命令形はカキヤーで、形がカクの仮定形カキヤ〈書けば〉に似ている。ところが〈来る〉の場合は、仮定形がコヤ、丁寧命令はイリヤーで、全く別の形である。そこで、カキヤ：カキヤーの類推によって、コヤからコヤーという形式ができた。この形なら〈来る〉の命令形コイヤコーとも関連づけられ、合理的である。こうしてコヤーという形式が出現し、若年層の間に急激に広まったのではないだろうか。

◆蚊にクワレタ〈蚊にさされた〉図4

図4 カニクワレタ



今の中学生は蚊にササレタと言う者が多く、クワレタを使う者はそれほど高率ではない。しかしその使用率を比べると、品野中だけ54%であるが、他校では半数弱であり、学校間の差としては小さい方である。

* * *

学校間の差の小さいものをまとめると次のようになろう。

ドベやクワレタなどは、瀬戸市だけではなく、日本各地で広く使われてきた伝統的な語形である。こうした強力な語形は、共通語形と同じであり、市外出身の人でも自分の出身地で身につけてきている。従って市街地でも団地でも同じように使われ、市内での地域差もない。どの地域の中学生もその語形を身につけて育つから、学校差もなくなる。中学生がこれらの方言形を身につけたのは、親など前の世代から受け継いだからである。

次に、ケッタやコヤーのような形は、この地方の若年層の間に急速に広がったものであり、瀬戸市でもこの年齢層には全域で使われている。上の強力な方言形と同様な勢力であると考えてよい。しかしこちらの方は中高年層とは関係がないから、親などから受け継いだものではなく、同世代の友人関係から得たものである。

今の瀬戸市では共通語化が進んでいる。蚊にクワレタより蚊にササレタを使う生徒の方が多。こういう共通語形の侵入は市内全域に及んでいるので、学校差が小さい。この中には多くの共通語の語が入る。これらは、前の世代や同世代からも習うが、教育やマスコミなど社会的な力によって身につけることが多い。

これら3種はそれぞれの時期に地域差を許さないほど強力に市内に広がったものである。こういうものに大きな学校差は見られない。今では半分以下である蚊にクワレタにしても、ササレタが広がる前の段階では強力な勢力であったと思われる。

学校間で差の小さいものにはもう一種類ある。共通語形や新しい語形が市全域に広がったために、古い語形がどの学校にも薄く残っている場合である。今、伝統的なカラカミ〈ふすま〉やオジャメ〈お手玉〉などは忘れられようとしている。これらのグラフは出さないが、どの学校でも共通語形に押されて少ないので、学校差は小さい。それに、消えかけて学校差が小さくなっているのは、このような昔からの方言形だけではない。最近変わったバンド⇨ベルト、コクテツバス⇨ジェーアールバスなどでも、その古い方はわずかの生徒に使われているだけである。クワレタにしても、将来はさらに少なくなり、このグループになるであろう。

以上から、学校間で差の小さいものを整理すると、

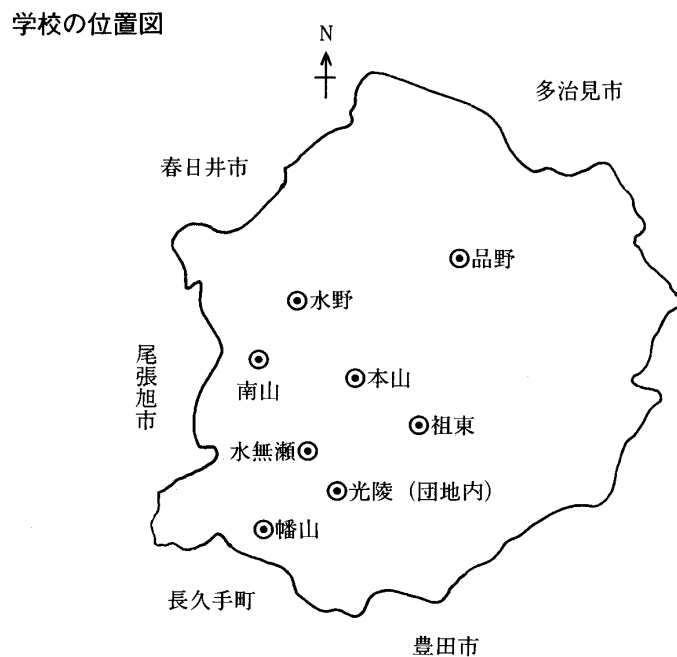
- 1 強力な方言形：ドベ、蚊にクワレタなど：前の世代から受け継ぐ
- 2 若者ことば ：ケッタ、コヤーなど ：同世代から得る
- 3 共通語形 ：多くの共通語形 ：社会的な力によって得る
- 4 昔からの語形：カラカミ、バンドなど ：ほとんど習得されていない

という4種になる。

方言の地域差の反映

学校差はそれぞれの学区のことばの差であるから、市内の地域差を反映したものである。学校差が目立つものには、そういう地域差のできた理由の説明できるものとそうでないものがある。このうち、方言の地域差を反映しているものから見る。

学校差と地域差を言う前に、瀬戸市の市域とそれぞれの学校の位置を見ておくと、図のようである。市の北東部にやや離れて品野中学校がある。その周辺は山地が多く、人口は少ない。市の人口は市域の西部と南西部に集中しているが、その集中地域の東部には祖東と本山の二校があり、西部には水野、南山、幡山の三校がある。水無瀬中学校は中間の地域にある。また光陵中学校は、位置的には中間であるが、昭和45年に新しくできた団地の学校であり、地域の伝統とも関係が薄いから、他地域の学校とは異なる結果が出ることもある。

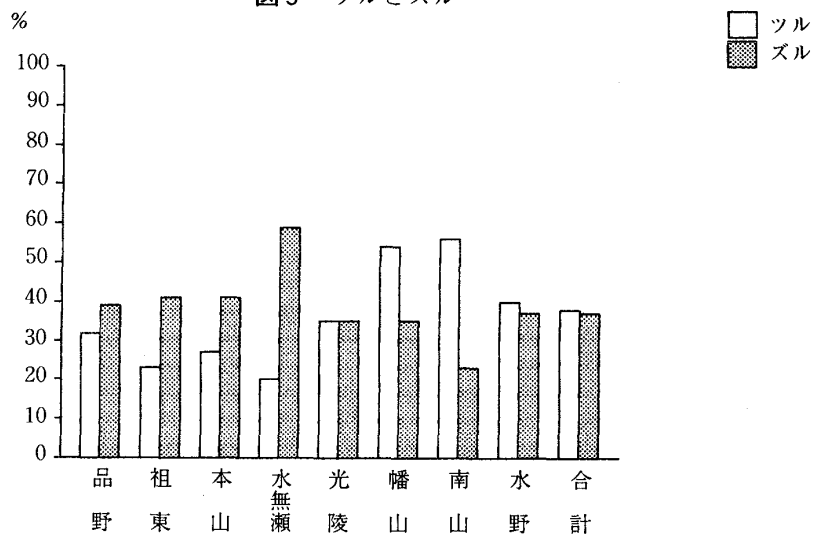


◆ツル、ズル〈二人で運ぶ〉図5

机など一人で持てないものを二人で持ち上げて運ぶとき、昔からの瀬戸市のことばはズルである。前述の上品野町の調査によれば、はえぬきの人には中学生にいたるまでズルである。しかし市内ではツルも使われている。

このツルとズルの使用の様子を学校別に見ると図5のようになる。

図5 ツルとズル



これによれば、市内の合計ではツル38%、ズル37%、あまり変わらない。ところが学校別に見ると、品野はじめ東部の学校ではズルが多いが、幡山や南山といった西部の学校ではツルの方が多い。

LAJ (『日本言語地図』) 68によれば、岐阜県南部、愛知県西部、三重県などがツルあるいはズルの地域となっている。尾張付近を見ると、西部・中央部はツル、東部と知多半島はズルで、ツルがその東のズルの地域へ新しく広がっているように見える。図5によっても、西部ではツル、東部ではズルが多く、瀬戸市周辺から市内の地域差がそのまま学校差として出ていると言えよう。そしてまたツルが広がってきた結果、この年齢層では市の西部までツルの領域となりにかけていることがわかる。

◆クロニエル〈あざになる〉 図6

図6 クロニエル

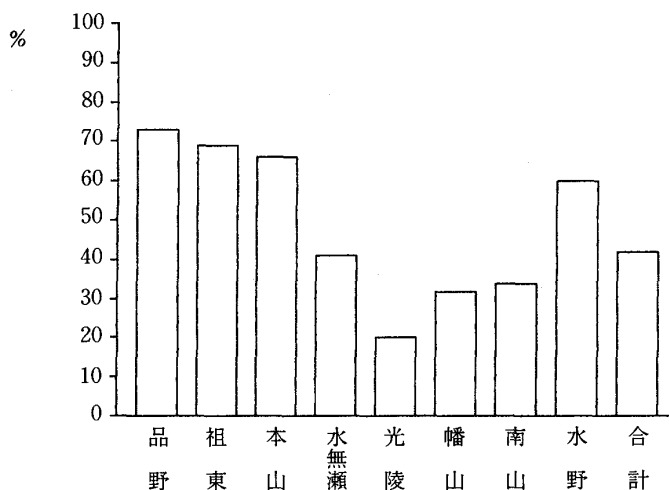
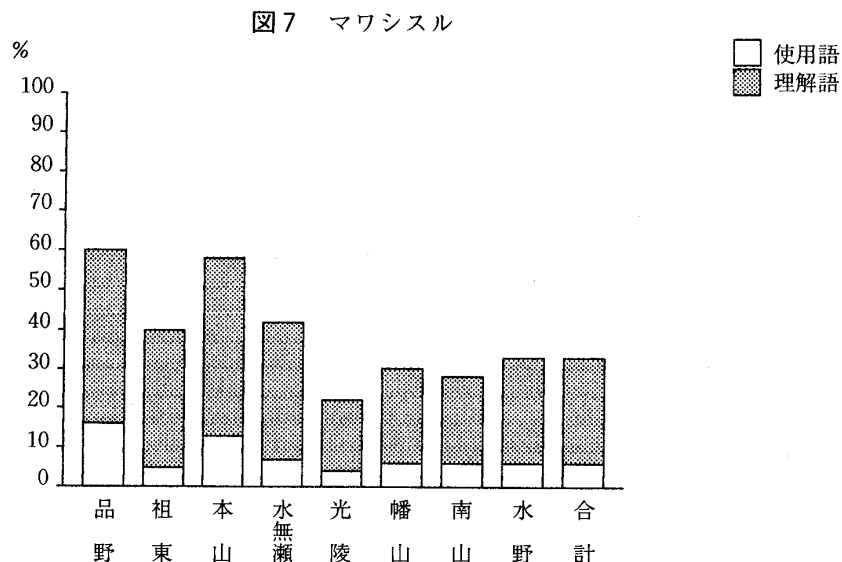


図5では、一つのグラフで新しいツルの侵入と同時に古いズルの保存状況も見られたが、このように2種の方言形が対立している例は少なく、新しい方は共通語形であることが多い。そこで次に昔からの方言形の残っている様子を見てみよう。LAJ80によれば、尾張北東部から岐阜県にかけて「強く打ったりして青黒くあざになる」ことをクロニエルと言う。この語形は名古屋や尾張平野部では使われていない。図6はクロニエルの使用状況である。

品野，祖東，本山という東部の学校では7割前後の生徒が使っているが，西部では少ない。既に共通語化したか，クロジニナルなど尾張中央部の語形を取り入れたのである。水野中ではクロニエルが東部並に多く使われている。この学校は市の北西部にあるから，もともとクロニエルの領域であるのかもしれない。

◆マワシスル〈準備する〉図7

共通語化が進んだため，この年齢層の使用語としては消えかけているが，理解語として残っている方言形がある。



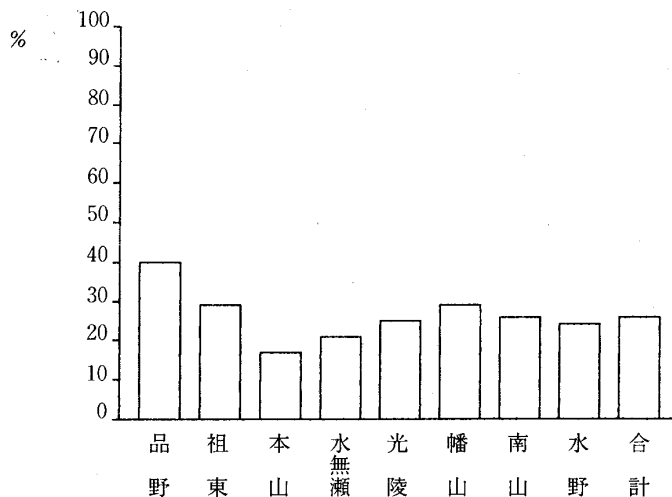
尾張地方では，準備することをマワシスル，マワシセルという。瀬戸においても中年以上には今でも使われている。ところが中学生になると，図7のように使用者は少ない。それでも東部に多く残っていることがわかる。これに理解語としている者を加えると，その傾向は一層はつきりしてくる。やはりこれらの地域では使用する大人が多いので，中学生でも理解する者が多いのであろう。

* * *

学校差では，北東部の品野中だけ目立って多いものがある。既に見たなかでも，図4の蚊にクワレタではややそういう傾向が見られた。

◆ナスビ〈なす〉 図8

図8 ナスビ



ナスビは西日本，ナスは東日本の方言形であり，その境界線は愛知県の中央を縦に通っている。瀬戸市はその線の西側に入っているから，昔からの言い方ではナスビである。しかし中学生では共通語形のナスが多くなってきている。ナスも西から広がって来たのであろうか，品野には古形ナスビが40%も残っている。他校との差は大きくはないが，学校の位置による地域差の特徴はでている。

◆ヨミヤース〈お読みになる〉 図9

図9 ヨミヤース

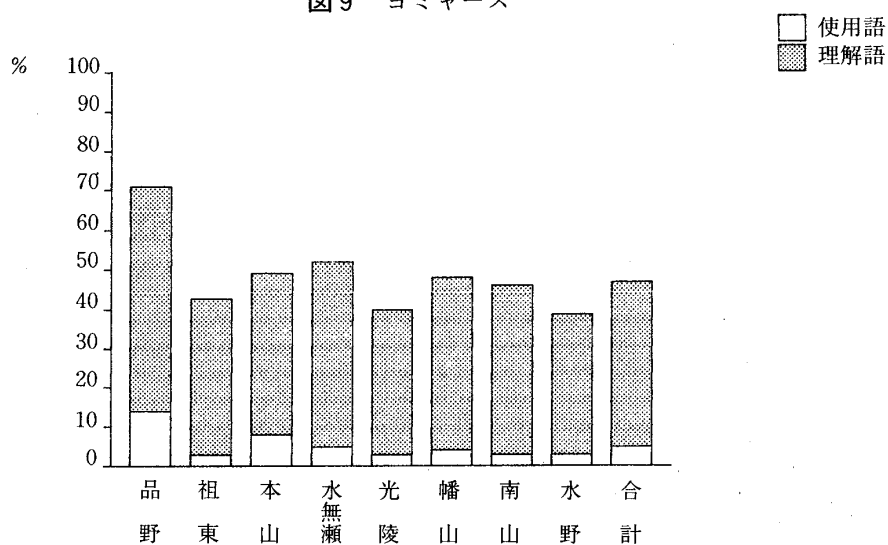


図9はヨミヤース〈お読みになる〉である。ヨミヤースの構造は，コヤーのところでも述べた

ように、動詞の語基部分に尊敬の意味の派生形成辞のついた /'jom-jaas-u/ である。この形式は市内でよく聞かれるように思われるが、大人の言語生活でも徐々に使われなくなっているようである。中学生の間でも今ではあまり使われていない。使用者はほとんどの学校で数%であるが、品野中においては14%である。これだけでも品野中の特色は見られる。この使用者に理解語としている者を加えれば、品野中では7割を越えている。他校は4～5割であるのに比べれば、品野中の多いことが目立つ。

* * *

以上で見てきたのは、学校差や地域差が、語形の伝播の結果として、言語地理学的に説明できるものである。

瀬戸市は尾張の東部に位置していて、古くから西方の名古屋や尾張平野部の影響を受けてきたので、新しい語形は西の方から市内に入り、徐々に東に広がったと思われる。従って現在の分布で東西の対立が見られれば、市の西部に分布している語形が新しく侵入して来たものであり、東部のものは昔からの語形である。

西の方の勢力がますます強くなってくると、新しい語形はさらに東に向かって広がる。そうすると西部から東部まで新語形を使っているのに、北東部の品野中だけが最後まで古い形を保っているということになる。

従って整理すると

- 1 西からの新語形：ツルなど、
- 2 a 東部の古形 ：ズル、クロニエルなど
- b 北東部の古形：ナスビ、ヨミヤースなど

という3種類になる。2 bは2 aの次の段階であり、さらに次の段階になると、市の全域が新語形になってしまい、前に見たような学校差のないものになる。

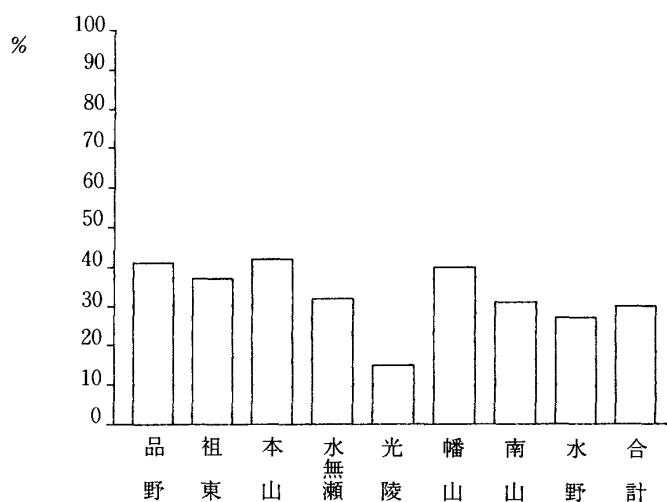
生活環境による差

以上のように言語伝播による地域差とは別に、団地だけが異なるものもある。既に見た中でも、光陵中だけ少ないものがいくつかあった。特にクロニエルなどは極端である。次にそういう例を見る。

◆アラスカ〈あるものか〉 図10

そんなことあるはずがない、と強く反語的に言い切るとき、アラスカという表現がなされる。このスカは、推量の助動詞スに反語の助詞カが接続したものである。こういう表現も今の中学生には次第に使われなくなってきたが、それでも図10のように、光陵を除く他校では4割から3割は残っている。他校ではそれほど学校差がないのに、光陵中だけが極めて少ない。

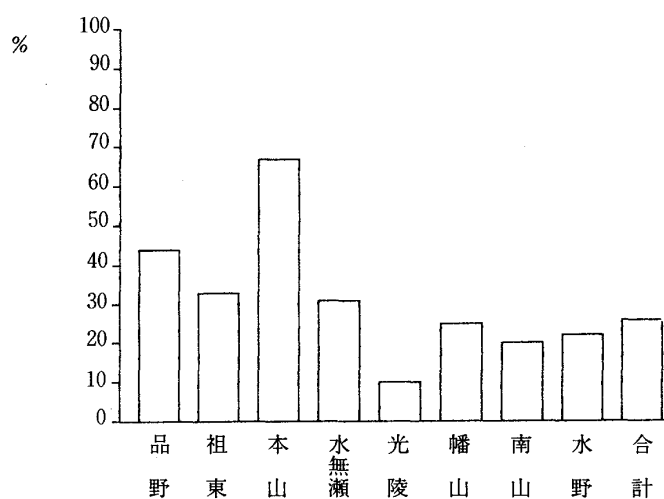
図10 アラスカ



◆ヤ〈断定の助動詞ダ〉 図11

断定の助動詞ヤも同様に、光陵中だけ少ない。ヤは、瀬戸市から岐阜県の東美濃地方にかけての方言形で、愛知県では瀬戸市の特徴的な表現である。図11は、どちらかという、古形ヤが、西部では少なくなり、東部に多く残っている状態である。しかしどれよりも光陵中で少ないのが目立つ。

図11 ヤ



* * *

アラスカやヤが光陵中で少ないというのも、各学校が学区という領域を持っている以上、地域差の問題として扱うことになるだろう。しかしこれらは、前に見たような言語地理学的な地

域差を反映したものではない。光陵とその他という対立である。この対立は、光陵中の位置とか言語伝播の問題ではなく、この学校が人口二万人余の団地の学校であるという社会的な理由による。団地という他の地域とは異なる環境によって生じた地域差である。

この菱野団地は昭和45年に入居が始まったので、既に20年になる。従って今の生徒自身はここで生まれ育った者がほとんどである。しかし両親の市内出身率は他校よりずっと小さい。両親が市外出身であり、それぞれの出身地のことばや共通語形を使っていれば、子供は瀬戸の方言形に接する機会が少ない。それにこの学区では祖父母と同居している割合も小さいので、昔のことばに接する機会も少ない。そのためこの学校の生徒だけが知らないということが起こったのであろう。

しかしドベ、クワレタ、ナスビなどのように、光陵中でも他校と同じように使われている方言形もある。これらは、方言形ではあるが、日本各地で広く使われている語形である。先に述べたように、共通語並の勢力である。市外出身の両親でもある程度は使っているであろう。それに対してクロニエルやアラスカなどは、愛知県岐阜県の中でも狭い範囲で使われていて、その出身の人しか使わない。そういう人が身近にいなければ聞かれない。従って団地の中学生は習得しなかったのである。

断定の助動詞にヤを使うのは、愛知県などでは多くないが、西日本ではかなり広く行われている。それにもかかわらず光陵中で少ないのは、団地ではダを使う地域出身の両親が多いからであろうか。

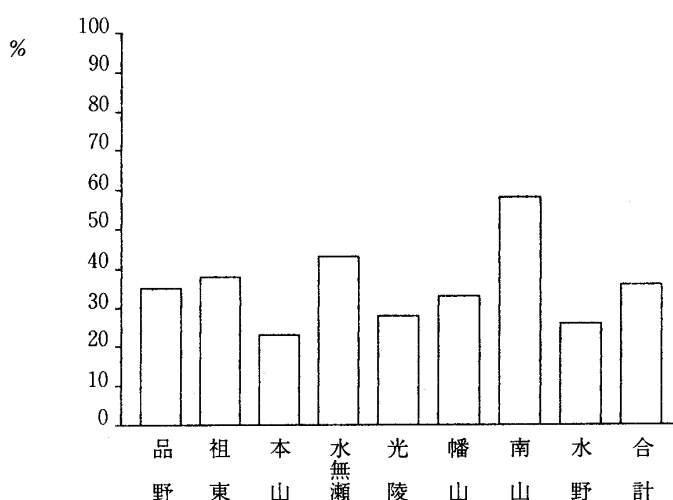
その他の学校差

以上で見てきた学校差は、市内の地域差を反映したものであるが、その地域差には、言語の伝播、生活環境など、歴史的な理由づけができた。このような学校差を見せるのは、この地域で使われてきた方言形の場合が多い。古くからの方言形の残っている地域の中学生が古いことばを使うようになったり、新しい団地の学校に昔からの方言形が少ないのは当然である。しかし今回の調査で見られた学校差が全て説明できるわけではない。瀬戸市内には理由のわからない学校差のある場合もある。

◆シャーペン〈シャープペンシル〉 図12

今の若年層はシャープペンシルをシャーペンと言うことがある。この項目の選択肢はシャープ、シャーペン、シャープペンシルの3個としたが、2個以上に○をつけた者も多かった。そのうちシャーペンに○をつけた割合を見ると、図12のような学校差がある。

図12 シャーペン



図によれば、南山中では58%であるが、水野、幡山などでは少ないので、西部に多いというわけでもない。というより水無瀬、祖東、品野など東部に比較的多い。南山と東部に多いのは、東西の対立ではない。また光陵も他校並で、団地对他地域という対立でもない。理由のわからない学校差ということになる。

シャーペンという語形は中高年層には使われていない。従って昔からの形が残っているのではなく、最近若年層に広がった形式である。しかし強い力で広がったのであれば、ケッタやコヤーのように、市内全域に学校差もなく広がってもよさそうなものである。この程度の使用率で、しかも学校差が目立つことから、シャーペンはケッタなどより弱い勢力なのであろう。あるいはケッタのように広がる前の段階であろうか。いずれにしてもシャーペンは言語地理学的な伝播とは異なる広がり方をしている。現代のような社会環境で、しかも若年層だけに広がる語は、こういう分布になるものが多いのかもしれない。

◆シン、ハリ〈ホチキスの針〉 図13

この項目の選択肢には、タマ、ハリ、シン、ハをこの順序で並べた。これも複数回答が多かったが、合計で最も多かったのはシン、次がハリであり、他は少なかった。タマは1割くらいで、ハはそれより少ない。ここではシンとハリについて見る。

選択肢は4個あるし、シンとハリの間でも複数回答があるので、完全に補い合っているわけではないが、一方が多ければ他方が少ない。どの学校でもシンが多いが、祖東と水無瀬ではハリもかなり多い。特に祖東ではシン53%対ハリ51%であり、ほとんど半々である。しかしハリは、品野、本山で少ないので、東部で多いということでもなさそうである。シンの方も東西の対立というわけでもなく、どちらも理由不明の学校差である。

図13-1 シンなど

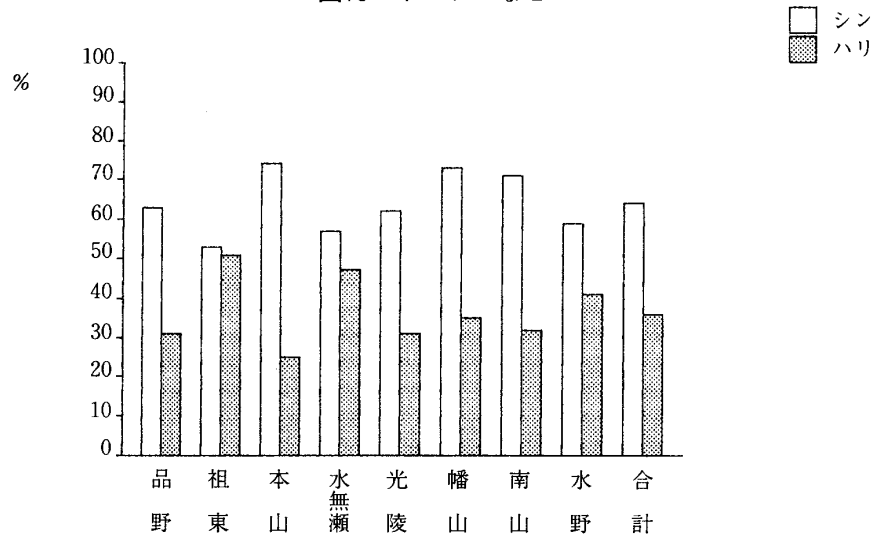
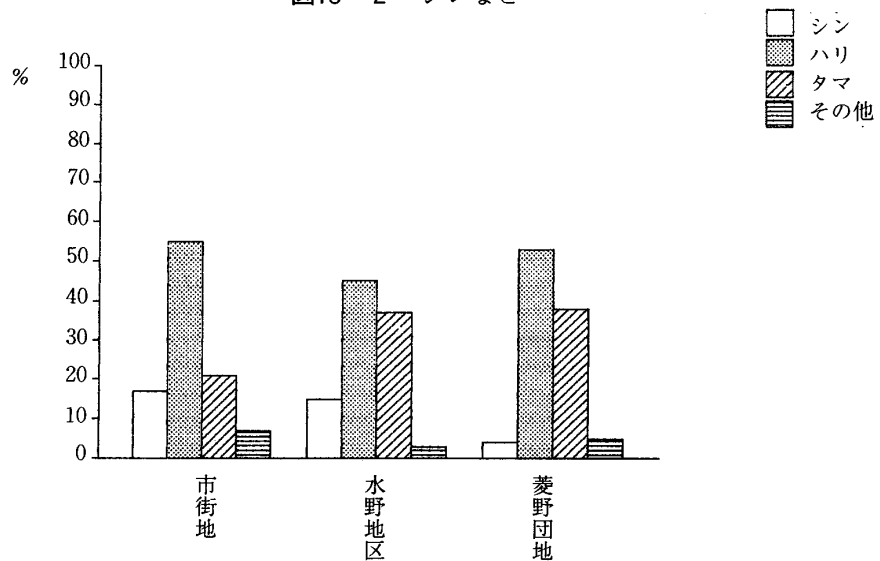


図13-2 シンなど



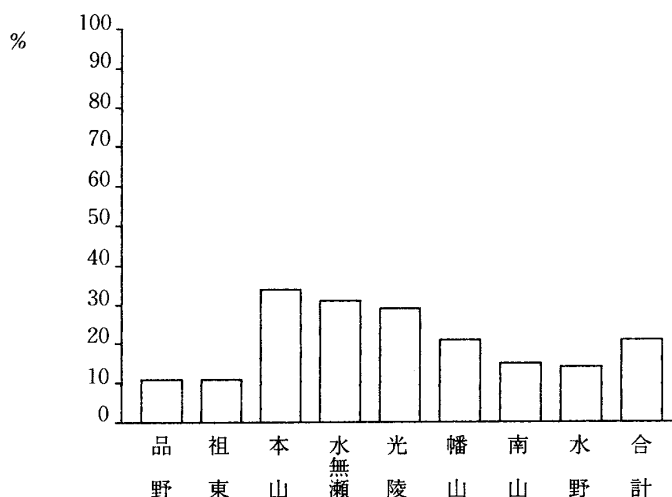
東京での調査結果では、ハリが一番多く、次いでタマである⁴⁾。瀬戸でも大人の使用語は、図13-2のように、ハリ、タマの順であった⁵⁾。従って瀬戸の中学生の間で使われているシンは、共通語や東京のことばを受け入れたものではないし、自分達の両親のことばを受け継いだものでもない。ケッタなどと同様に、若年層の間に新しく広がった方言形である。このシンは瀬戸市だけではなく、東海地方の若年層には広く使われているようである。

筆者はホチキスの針を共通語でどう言うのか知らないが、ハリは共通語形の一つであるように思われる。ケッタやシャーペンのように俗語的な形式ではない。それにホチキスは文房具で

あるから、学校の中や教育関係によって広がることが考えられる。祖東中でハリの多いのはこの学校の指導の結果かもしれない。

◆カンダンケー〈寒暖計、温度計〉 図14

図14 カンダンケー



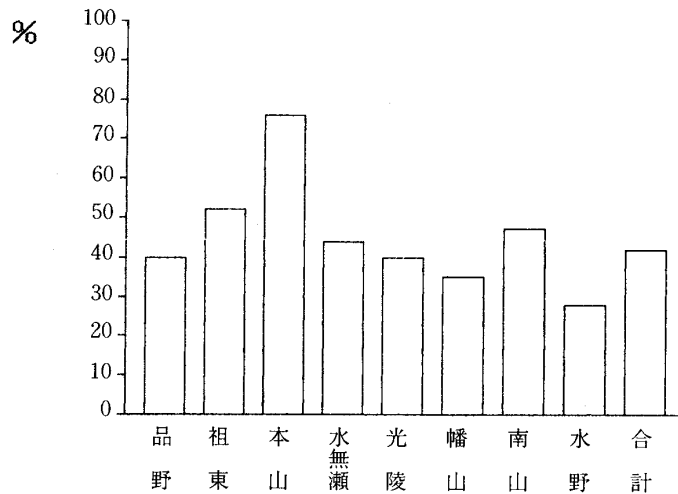
シャーペンやシンは若年層のことばである。しかし理由不明の学校差の見られるのは、古い語形の理解の場合にもある。

今の中学生はカンダンケーという語形を使わない。ほとんど全員がオンドケーである。カンダンケーを使う者はどの学校でも0～3%であるから、グラフにならない。そこで理解語の者と合計してグラフにすると、図14のように知っている者はまだかなりいる。本山、水無瀬、光陵で多く、他校ではやや少ない。本山中は昔からの市街地の学校で、光陵中は団地の学校である。この3校に共通する特徴は少ない。敢えて言えば、いずれも市の中央部であり、互いの位置が近いことくらいである。これを地域差とするならば、市の中央部で多く残っていて、周囲で少ないということになる。しかしこの位置関係は偶然であろう。

◆インチャン〈じゃんけん〉 図15

前に述べたように、伝統的な方言形はどの学校でも少なく、学校差も小さい。それでも理解語としている者も加えると、多少の学校差は見られる。その中には説明できない学校差となる例もある。例えば図15のインチャンは本山中だけに多い。最多の本山中と、最少の水野中を除けば、学校差がないようなものである。他にもこのような例はいくつかあった。

図15 インチャン



* * *

以上でその他の学校差を見てきた。理由不明のいろいろな学校差が「その他」であるから、それらをまとめて考えることはできない。学校差の型よりも語の性質で敢えてまとめれば、

- 1 新語形 : シャーペン, シンなど : 若年層だけで使用
- 2 古い語形 : カンダンケー, インチャンなど : 若年層では減る

ということになろうか。

ま と め

瀬戸市内の中学校間の言語差に関して、語を分類すると、次のようになる。

◆学校差の小さいもの

A 共通語形

- 1 共通語形またはそれに準ずる語形

B 非共通語形またはそれに準ずる語形

- 1 前の世代からの強力な方言形 : ドベ, クワレタなど
- 2 若年層の間の強力な新語形 : ケッタ, コヤーなど
- 3 習得されない古い語形 : カラカミ, バンドなど

◆学校差の目立つもの

A 方言の地域差の反映

- 1 西部から伝播した新語形 : ツルなど
- 2 東部, 北東部に残る古形 : クロニエル, ナスビなど

B 社会的な差の反映

- 1 団地で使われない方言形：アラスカなど

C その他の学校差

- 1 若年層の間の新語形：シャーペン、シンなど
- 2 理解されるだけの古い語形：カンダンケー、インチャンなど

注

- 1) 拙稿「中学生の使用語とその男女差」(『東海学園国語国文』37号 1990)
- 2) 瀬戸市上品野町で中学生以上のはえぬき155人の面接調査をした。その結果による。
- 3) 瀬戸市内の3地区で転入者も含めてアンケート調査した。そのうち一定の年齢層、瀬戸市街地228人、水野地区200人、菱野団地166人の結果と、注2)の調査の結果による。
東海地方のケッタについては、真田信治『日本語のゆれ』(南雲堂 1983) pp. 139-141や真田信治「方言意識と方言使用の動態」(『方言研究の探索』秀英出版 1988) pp. 60-61
- 4) 荻野綱男・山敷陽子「東京における新方言」(科研費報告書、代表井上史雄『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』1983) p. 47
- 5) 注3)の3地区調査の結果による。